

GHOST

written by HADEYA

1

奈美とセックスする。ガンガン腰を突き上げる。やがて絶頂が訪れ、奈美の顔にブチ撒ける。

それが今、啓太が頭の中でイメージしている事。そのイメージを盗み見ている者がいる。俺、だ。啓太に憑依したのは数分前。深夜の地下駐車場で、だ。啓太は愛車に向かって歩いていた。そこを背後から接近し、スウッと背中から憑依した。目撃者はいない。確認済みだ。

「なあ、啓太」

俺は語り掛けた——脳内で。啓太が手にしているキィを落とし、周囲をキョロキョロ見回す。誰もいない。誰も。俺は続けた。

「お前、組のブツに手を出してるだろう？」

「だ、誰だ……」

「誰でもない、ゴーストだよ」

本当の話だ。俺の正体はゴーストだ。死んで、ゴーストになった。殺されたのだ。こいつが……啓太が俺を撃ったのだ。背中から。

「今度は俺の番だ」

「だ、誰だ！」

啓太が叫ぶ。叫びながら後ろ腰から拳銃を抜いた。

「殺ってやらあ、マジで」

啓太が俺を撃った時に発した台詞を俺は呟いた。啓太が「はっ」とする。ま、まさか……。

「……ゴウさん？」

「そう言う事」

俺は力を込めた。啓太の右腕を操作して持ち上げる。拳銃を手にした右腕を。

「ゴ、ゴウさん、どこにいるんですか？」

「ここだよ。お前の肉体だよ」

そう言って、俺は右腕を曲げた。啓太の右腕を。銃口を啓太のコメカミに宛がう。

「ちょ、ちょっと待って下さい！俺は——」

「お前は死ぬ。今、ここで。言い残す事はあるか？」

「ゴウさん、助けて下さい！」

「駄目だ」

そう言って、俺はトリガーを引いた。

……今、思えば、この時、既に陰謀は始まっていたのだ。俺がトリガーを引いた瞬間に。闇の中、彼女を見ながら俺はそう考えていた。彼女は右手に手斧を握っている。勿論、俺は動けない。もはや生気を失っているからだ。

彼女が右腕を高く掲げる。そして手斧が翻った。銀色の光が鈍く輝き、ガツンと頭蓋骨を砕く音がした。

何度も、何度も。

彼女は俺を殺した。地下室で。

何故、こうなったのか。事の始まりは先週の水曜日。俺がまだゴーストだった頃の話だ。

2

分からない事があった。生前、何故、俺が殺されたか、だ。真相を知ったのが、水曜日。その頃、俺は自分を撃つたのが、対抗組織……稲城会のヒットマンだと疑っていた。俺には撃たれる理由がなかったからだ。稲城会の構成員に片っ端から憑依して突き止めたのが、哲也の存在だ。

後に分かったのだが、哲也は警察とつながっていた。哲也とつながっていた刑事の名は、寄田武。汚職刑事だ。寄田は哲也に警察の内部情報を売っていたのだ。

二人の関係は長い。そして、それだけの関係では満足が行かなくなった。二人は裏社会を牛耳ろうと言う事になったのだ。その事実をある警察官に突き止められた。警官は口止め料として、二人に三億円を要求した。二人は金を支払う事にした。

金を工面する為、組織の金に手を出した。組の金を持ち逃げしたのだ。その後、哲也は啓太に命じ、俺を背後から射殺する。俺の死体を東京湾に捨て、俺が組の金を持ち逃げしてトズラした事にしたのだ。ところが俺はゴーストになった。真相を知り、その後、地下駐車場で啓太を射殺する訳だ。

今、俺は街を彷徨っている。俺の射殺を啓太に命じた哲也を暗殺する為、池袋に向かっているのだ。

*

「と言う訳だ」

運転席の俺が彼女に告げる。助手席の彼女——奈美に。奈美は問うた。

「けど、それは陰謀の始まりに過ぎなかったって、事？」

「そう言う事だ」

言いながらタバコに火を点けた。くわえ煙草で車を運転する。俺たちが目指しているのは安全な場所……人里、離れた納屋だ。

今、俺たちは連中から逃げている。三億円を持って。そして納屋の地下室で俺は奈美に殺されるのだ。

3

俺の復讐計画は着々と進んでいた。池袋で哲也に憑依し、スマホで連絡を取り、寄田と会った。寄田に憑依し、口止め料を求めている警官と会う。全員の所在は突き止めた。まず殺すのは哲也からだ。哲也に憑依して住居に侵入した。啓太と同じやり方で哲也を射殺すると、引き続き寄田と強請っている警官を射殺した。俺の復讐計画は達成された。

警察の捜査が進む。最近、自殺した四人に接点がある。そして剛と言う男——生前の俺が行方不明になってい

る。同時進行で組織から三億円が消えている。警察は俺を容疑者と断定し、捜査を進めた。やがて、一人の女性が捜査線上に浮かぶ。それが奈美だ。奈美の電話番号が被害者四人の携帯電話に登録されていたのだ。俺はこの事件の担当刑事に憑依して、その事実を知った。刑事が奈美に会う。奈美は娼婦だった。〈コンキスタドール〉と言う風俗店で働く風俗嬢。何か知っているかも知れない———そう思い、俺は奈美に憑依した。だが不思議と奈美の心が読めない。確かな事は奈美の心が底なしの暗黒だった事だ。

*

そして今、俺は奈美とラブホの一室にいる。目の前のテーブルにはノートパソコンが置かれている。俺は奈美に言った。

「振り込むぞ」

「振り込んで」

エンターキーを押した。強請を掛けていた警察官の銀行口座から三億円を奈美の口座へ振り込んだ。

「振り込んだ」

「あとは遠くへ逃げるだけ」

愛してる———そう言って、俺は奈美の唇を奪った。奈美が濃密に舌を絡めて来る。そいつは極上の味だった。

4

それから担当刑事に憑依して、再び奈美と会った。刑事としてではない。客として、だ。何故、会ったのか。

奈美に惹かれたからだ。

コンキスタドールに連絡を入れ、ホテルの一室で奈美を待つ。30分して奈美は現れた。俺たちはプレイに入った。奈美は本番をしても良いと申し出た。

事を終え、煙草に火を点けた。奈美が帰り支度をする。俺は提案した。

「奈美」

奈美がこちらを見た。俺は意外な事を申し出た。

「この事件には三億円が絡んでる」

奈美の目が魔性の目に変わった。金の匂いを嗅ぎ付けたのだ。俺は続けた。

「この三億円は外には出ない金なんだ。何故か分かるか？」

奈美がベッドに着席する。俺の目の前に。

「詳しく教えて」

「実はこの金……内部調査の金なんだ」

俺は知っている事を打ち明けた。今、憑依している刑事の思考から読み取った事を。警察官は強請っていたのではないのだ。警察官は囮捜査官だった。組織に潜入する為、寄田を強請ったのだ。

この事件の根底にあるのは暗黒街の支配。支配するのは次期警視総監。警視総監の狙いは自分の支配下にある暗黒街で手柄を次々と上げる事。その功績が認められ、警視総監に就任するのだ。ライバルを蹴落として。

「つまり次期警視総監はこの件を闇に葬る？」

奈美の口調は興奮を帯びていた。俺は続けた。

「だろうな。四捜査が存在しなかった事にするんだ。つまり警察官が単独で強請りを掛けていた事にする」

「警察官を見捨てるって、事でしょう？」

「ああ。つまり、この三億円は個人資産と言う事になる。表に出ないって事だ」

「何で、その話を私にするの？」

奈美は求めている。俺が誘うのを。俺は言った。

「三億円、欲しくないか？」

「乗る」

迷わず、奈美は言った。その時、俺の顔に激痛が走った。顔を押しさえ、俺は呻き声を上げた。

「うう……」

「どうしたの？」

「わ、分からない」

俺は洗面所に駆け込んだ。鏡を見る。俺の顔がドンドン変形して行く。奈美はその光景を無言で眺めていた。やがて俺の顔は完全に変形した。生前の俺——ゴウに。

「……どう言う事？」

息を切らせながら俺は言った。

「何もかも説明する。何もかも」

俺は自分がゴーストになった経緯を奈美に説明した。自分がゴーストでなくなった事も。奈美は信じた。そして俺たちは俺が持参したノートパソコンで三億円を奪い、人里離れた納屋を目指すのだ。

5

斧で殺そう——奈美は考えていた。地下室に私は連行された。レイプされそうになったところで反撃に出た。正当防衛に違いない。三億円は私のモノになる。次期警視総監はこの案件をそれで片付ける筈。

「本当に安全なのか？」

運転席のゴウが尋ねた。私は答えた。

「何が？」

「その静岡の納屋」

「安全。絶対」

「俺は指名手配されてる」

「だから潜伏する。時効まで」

「それしかないな」

そう、それしかない。私に殺されるしかないのだ。

6

「女には恵まれない人生を歩んで来たんだ——」

煙草に火を点け、ゴウは言った。

「——でも、ようやく運命の人と巡り会う事が出来た」

そう言って、奈美を見て微笑む。奈美も笑みを浮かべた。

「その後は？ どうして組に入ったの？」

「他に出来る事がなかったんだ。暴力団の組員になる事しか。腕っ節には自信あったからな。高校を中退して、すぐ組員になった。そこから先は待ったなし。この年までガムシャラに生きて来た」

「そして、ゴーストになった。どうやって、ゴーストになったの？」

「啓太って言う舎弟がいた。そいつが俺を——」

車内での身の上話が續いていた。奈美はじっと耳を傾けていた。

7

「俺の話はこれくらいにしよう。今度は奈美の番。奈美はどんな人生を歩んで来たの？」

「私は——」

私は金に飢えて生きて来た。金が欲しくて風俗嬢になった。金にならなくて、モガキ苦しんで生きた。だが三億円が手に入る。三億あれば……

「——って、感じ」

長い事、喋っていた。喋り疲れた。そろそろメールを打とう。

「事務所に連絡を入れなきゃ」

そう言って、私はバッグからスマホを取り出した。

「退職理由、何て言うの？」

「普通に辞めますって」

私はメールを打った。メール先は事務所ではない。事務所など、どうでも良い。私のメール先は静岡の納屋の所軸警察署だ。SOSの一言を発する。アリバイ工作に繋がるし、GPSから納屋に警察が駆け付ける筈だ。私はメールを打ってる振りをしながら警察署のホームページを探していた。

8

パソコンにメールが届いた。件名に一言——SOSと記述されている。

事件性のあるメールだ。そう思い、婦警は担当部署に連絡を入れる為、立ち上がった。警察が動き始めた。

陰謀が動き出す。カタカタと音を立て。

陰謀が動き出す。新たな陰謀へ繋がる為に。

陰謀が動き出す。人里離れた静岡の納屋に向かって。

陰謀は誰にも止められない。人生は非情と相場が決まっているから、だ。

9

納屋に着いた。車から降りた。納屋を眺め、俺は呟いた。

「立派な納屋だ」

「父の物件なの。いつでも入れるようになってる」

そう言って、奈美がキーホルダーの鍵でドアを開けた。奈美が中へ入る。

「お邪魔します」

続けて俺も中に入った。奈美はドアを閉めた。

奈美が内側から鍵を掛ける。玄関で靴を脱いで、邸内に入った。思っているより、広い。

「寒いな」

「暖房、今、付けるから」

奈美がヒーターを付ける。俺はソファに腰掛けた。

「ここで時効まで過ごすのか」

奈美が目の前にやって来て、俺にキスした。右手は俺の股間を弄っている。

「一発、犯ろう」

「地下室にベッドがある」

俺は立ち上がった。奈美の後ろを歩く。奈美が地下室のドアを開けた。

「降りて」

言われるがまま、俺は階段を降りた。そこで背後から突き飛ばされ——

10

俺は階段を転げ落ちた。

「うぐうっ！」

正面の棚に激突し、俺はくぐもった呻き声を上げた。身体が痛くて、身動きが取れない。力を振り絞って声を出した。

「一体、どう言う——」

奈美が階段を降りて来る。右手には手斧が握られている。

俺は真相を知った。奈美は俺を殺すつもりなのだ。殺すつもりで、この納屋に呼んだのだ。三億円を手に入れ、独り占めするつもりなのだろう。

「そう言う事」

俺は観念した。一つだけ聞きたい事があった。俺は尋ねた。

「一つ、教えてくれ……」

斧が翻った。ガン！ と大きな音がした。頭蓋骨が砕ける音だった。奈美は言った。

「死人に口なし」

そう言って、奈美は手斧で何度も俺の頭を叩いた。俺が聞きたかった質問は「一時的にでも俺を愛したか？」だった。なお奈美が俺の頭を斧で叩く。もはや俺は虫の息だった。

11

最後の最後で考えた。朦朧とした意識で俺は尋ねた。

「俺を……愛した……か……？」

奈美は答えた。息を切らせながら。

「……愛した。心から愛した。今も愛してる」

奈美が手斧を振り翳した。銀色の鈍い光が煌めき、手斧が俺の頭蓋骨に突き刺さった。

12

奈美は……美しかった。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872